



映画に
宛てた
ラブ
レター

2013・11月号

天見谷行人

スーサイド・ショップ

2013年10月1日鑑賞

これであなたも首を釣りたいくなる？稀有な駄作

パトリス・ルコント監督、初めてのアニメ作品です。ネガティブな一家が家業として代々引き継いできた「自殺用品専門店」

首吊り用のロープから、毒薬、一発だけ弾の入った自殺用ピストルから、果ては、ハラキリセレモニー用の日本刀まで置いてあります。



そんな商品を売るのは、奥さんから「ミシマ〜」と呼ばれるご主人なんであります。

よほど、三島由紀夫はフランスではハラキリの代名詞になっているのでしょうか？

二人の子供がいて、自殺屋さんにふさわしい、とてもネクラな子供に育てられています。そんな夫婦に三人目の子供が生まれます。この子が、どうにも自殺屋さんに似つかわしくなく、とってもほがらか。周りにニコニコと愛想がいい。その笑顔を見てると、皆ハッピーになって、誰も自殺屋さんにやって来なくなる恐れがあります。そこで夫婦は、この超ポジティブな子供を、何とかネガティブに育てようとするのですが.....というおはなしです。

フランスを中心にした、ヨーロッパで作られた作品なんで、きっと、ダークファンタジーみたいな仕上がりになっているんだろう、どんな捻りを効かせてくれるのか？と期待しましたが、まったく何のひねりもないんです、これが.....。

実にあっさりしてる。

せっかく「ハラキリ」とか「ミシマ」とかいう、キーワードが出てくるのですから「自殺の美学」みたいなエスプリや、香りを効かせて欲しかったなあ、と思います。

また、ショッピングにやってくるお客は皆当然、自殺志願者なのですが、何に絶望して、自殺しようとするのか？ それは全く描かれていないんですね。冒頭、電線に止まっているハトまでも、絶望して自殺してしまう所はすこし笑えますが、それほどこの街や、社会や、家族や、自分に対して、自殺に至る、納得出来る強烈な動機が必要です。その説明が何にもない。だから映画のセカイに入って行けない。

お陰さんで途中、僕は爆睡してしまいました((__))..zzzzZZ



アニメの表現については、日本は世界最先端を行っているわけです。日本人はアニメをみる目が肥えているのですね。本作はアニメ表現という点でも、あまり目新しい事もなく残念です。

以前観たアリ・フォルマン監督の「戦場でワルツを」というシリアスなアニメはとても斬新でした。

爆睡から覚めてスクリーンでは

「自殺はしちゃダメ、人生を楽しもう」という、あまりに当たり前すぎて、かえって虚しいメッセージのオンパレードとなります。

料金払って警察や、お役所のキャンペーンスローガンを見ているようで、実に損した気分にしてくれる作品です。(^_^)

なるべく気をつけて、観る作品を選んでいるのですが、時にはこういうハズレ映画にぶち当たり

ます。まあ、僕がもし映画監督なら、この作品を作った時点で首を釣りたいかなるでしょうね。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆

総合評価 ☆☆

作品データ

監督 パトリス・ルコント

主演 ベルナール・アラヌ、イザベル・スパッド

製作 2012年 フランス、ベルギー、カナダ

上映時間 79分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://www.youtube.com/watch?v=ckHk91X_R3k

ダイアナ

2013年10月21日鑑賞

魅力的でありすぎた悲劇のプリンセス

僕がこの作品、いいなとおもったのは、ダイアナ妃に対して、監督、スタッフ、俳優たちすべてが、とても敬意を払っているということです。スクリーンから、その映画づくりの姿勢が見えるようです。

このお話はダイアナ妃が、チャールズ皇太子と別居し、事故死に至るまでの過程を描いてゆきます。

彼女の不幸は、皮肉にも、彼女があまりにも魅力的でありすぎたこと。そして、嫁いだ先が、たまたま英国王室であった事。更には、彼女が、自分の直感や、情念に大変素直に生きる人であった事。

これらが全て、複雑に絡まり、あの悲劇的な事件につながってしまったのでしょう。

彼女は別居後、病院で知り合った、パキスタン出身の心臓外科医ハスナットと知り合い、後に恋に落ちます。

彼女はなぜその医師に恋してしまったのか？

ハスナットはダイアナを「英国王室の皇太子妃」ではなく、一人の女性「ダイアナ」として接してくれたのです。

どこへ行っても付きまとう「英国王室皇太子妃」という窮屈なトレードマークにうんざりしていた彼女には、医師ハスナットのさりげない、分け隔てない人への接し方が、大変魅力的に見えたのでした。



やがて彼女は、ハスナットとこっそりデートを楽しむようになります。変装用の長い黒髪をつけて、出かけるクルマは執事のマイカーを借りて。

繁華街へ繰り出すダイアナ。宮殿には無い、とっても自由な雰囲気を楽しむダイアナ。もはや、恋人であるハスナットとファーストフード店に入るだけでもワクワクします。

この辺り、あの名作「ローマの休日」のアン王女のローマ散策シーンのようで、観ているこちらにも楽しくなります。

さて、男女の関係にまで発展してしまった、ふたり。やがて、二人は真剣に自分達の立場や関係、将来を考えるようになります。

パキスタン出身のハスナットは、イギリスと言う異国の地で、心臓外科医になりました。それは独力で築き上げた地位です。彼にはその自負心もありました。ダイアナは、良かれと思って、もっと権威のある病院へ勤務出来るようにと働きかけます。しかし、医師ハスナットにとっては要らぬお世話。彼は激怒します。気まずくなるふたり。

さて、そんなふたりの交際をゴシップ記者が嗅ぎつけます。写真が新聞に乗る。世紀の大スキャンダル。いわゆるパパラッチに、ダイアナは四六時中追いかけ回されます。

知人とレストランに入り、一口食べようと口を開けたとたん、フラッシュがバシャッ！！！！

いやあ、有名人になると、こんな、嫌な目にも会うんですねえ。

なお、映画後半、このフラッシュがバシャバシャ、光るシーンがありますので、鑑賞には気をつけてください。（余談ですが、知人にてんかん発作を持った方がおられます。強い光をみると発作が起きてしまうのです、こういう作品を鑑賞される際は、くれぐれもお気をつけくださいませ）

ダイアナ妃は後に、アバンチュールを楽しみながらも、紛争地に自ら赴き、惨状を目にします。病院に寝かされた子供達。足が吹き飛んでいる。地雷でした。何の罪も無い子供達が、多くの地雷で命や身体の一部を失ってゆく。国家や、大人達が仕掛けた戦争で、多くの子供達が不幸になってゆく現在進行形の出来事。彼女は決意します。自分は全世界から見られている存在。ならば、それを逆手にとって利用する。世界の平和のために。子供達の幸せのために、自分は尽くそう。



全世界に影響力を持つ一人の女性として、ダイアナは人道的な立場から「地雷を無くそう」と呼びかけます。

ようやく自分の進むべき道を見つけたかの様に思えた時、彼女は不慮の事故で、あっけなく世を去るのです。

何という残念なことでしょうか。

彼女が生きていれば、もっと多くの子供達を救う活動が出来たかもしれません。

心より、敬意と哀悼の気持ちを、この映画に寄せたいと思います。

なお、主演のナオミ・ワッツさん、ダイアナ妃という実在の人物、そして大役をよく演じたと思います。それに医師役のナヴィーン・アンドリュースさんの演技が光りました。お二人に拍手を！！

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 オリヴァー・ヒルシュピーゲル

主演 ナオミ・ワッツ、
ナヴィーン・アンドリュース

製作 2013年 イギリス

上映時間 113分

予告編映像はこちら

<http://www.youtube.com/watch?v=-vioxYLyqkE>

ルノワール 陽だまりの裸婦

2013年10月22日鑑賞

「幸せな肌、幸せな音につつまれて」

この作品はルノワールの晩年を描くものです。原作はルノワールの息子、ジャンが書いた著作だそうです。そのためか、監督もジャンの視点を尊重して描いた様に僕には思えました。物語は、年老いたルノワールのアトリエに、若い女性モデル、アンドレがやってくるころから始まります。彼女は透き通る様に美しい「金色」のきめ細やかな肌を持っていました。ルノワールはアンドレの美しい肌が気に入りました。彼女をモデルに、黙々とキャンバスに筆を遊ばせるルノワール。



しかし、その身体はリュウマチに冒され、手足が不自由です。車椅子に乗り、曲がった手の指に絵筆をくくりつけてキャンバスに向かいます。そこへ、戦地から怪我の療養のため、次男のジャンが帰ってきます。

息子の無事な帰還を喜ぶルノワール。しかしジャンは、怪我が治れば戦場に戻るつもりだ、と父親に告げます。彼は後に映画監督ジャン・ルノワールとして名声を得るのです。

ルノワール本人は、すでに地位も名声も富も手に入れていました。郊外の館に住み、身の回りの世話をしてくれるメイド達が何人もいる様な生活です。そんな彼は元々、磁器の絵付け職人だったのです。その修行が身体に染み付いている。だからルノワールは職人技にこだわります。何よりも対象物を美しく描くこと。絵の注文主を、実物以上の魅力的な人物に描いて見せる、そう

いう技量と、こだわりを持っている。

ルノワールは言います。

「私は職人だよ。芸術家は嫌いだ」

ルノワールがバリバリ活躍していたころ、芸術家を自認する画家仲間からは、彼の創作態度を批判する人達がいたそうです。

曰く、「パトロンから金をもらって絵を描くなど、もってのほか」「あんなもの、芸術とは言えない」

そう言う人達に限って、生活に困らない、裕福な家の出身者でした。ルノワールは、そんな雑音に耳を傾けず、自分流を貫きます。あくまで美しく、楽しげな、そして何より「幸せな絵」を描こうとしていた様です。



本作はとても静かなタッチで描かれた作品です。まさに印象派絵画を鑑賞しているかのようです。うっかりすると眠ってしまうぐらい。

なお、日本版タイトルにもある「裸婦」については、もちろん、ヌードシーンもあるのですが、あくまで映画に彩りを添えるような味付けなんですね。僕が本作で、最も心惹かれたのは、監督の音に対する実に繊細な感覚でした。本作を観る限り、ルノワールは屋外で絵を描く事が好きだったようです。森や、川のほとりや、草原でイーゼルを立て、キャンバスに向かいます。そのときの森の木々のざわめき、風の音、虫の音、そして愛らしい小鳥のさえずり。もちろんこれらのシーン、音楽は一切ありません。ひたすら自然の奏でる、豊かな音のハーモニーを楽しめるように描かれております。本作のエンドロールでは、なんとも愛らしい、小鳥のさえずりがずっと聞こえています。

本作をご鑑賞の皆様、どうかエンドロールの最後まで、耳を済ませて静かにご鑑賞ください。ときには、こう言う作品もいいものですよ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ジル・ブルドス

主演 ミシェル・ブーケ、クリスタ・テレ

製作 2012年 フランス

上映時間 111分

予告編映像はこちら

<http://www.youtube.com/watch?v=7h5fpyzNBI8>

陽だまりの彼女

2013年10月16日鑑賞

2013年最強のデートムービー

”こんど映画、観に行こうよ！” 恋人を誘って映画館へ……。いいですなあ。最近の若い人たち、映画観てますか？ 今でもデートコースの定番なんですかね？ わたくし53歳のオジさんにはさっぱり分かりませんが。本作は、恋人を誘うための「仕込み」にはぴったりですよ、そのあなた、準備はよろしいですか？ 何と言っても、美しい美男美女のスターが、大きなスクリーンで「ホレタ、ハレタ」の恋物語を真っ昼間から演じてくれるのですよ。それも真っ暗な密室の映画館で……。本作をカップルでご覧になる方は、是非これを機会に、横に座っている恋人の手を、そっと握ってみてください。もちろん、ロマンチックというオブラートで包んだ、不純な気持ちをいっぱい込めてね。フッフッフッフ（これはバルタン星人の笑い方。五十代の方には通じるのですよ）さて、本作の主演はアイドルグループ嵐の松本潤君。僕のお目当ては共演の上野樹里さん。ファンです。(#.^.#)ポッ。広告代理店に務めている浩介（マツジュン）彼は仕事で女性下着会社の担当になりました。打ち合わせの時、出会ったのが、10年前の同級生、真緒（のだめではない上野樹里）彼女はちょっと天然の性格からか、学校ではクラスメートからいじめられていました。それを救ったのが浩介でした。再会した二人に恋が芽生えます。



しかし

真緒の父親はお固い元警察官。「結婚したい」とまで言い出す彼女と、浩介を許しません。なぜなら真緒には表には見えない障害があるからでした。いつ病気になるか分からない。いつ再発するか分からない。それでも愛し合う二人には、障害など乗り越えて行こうとする、若さと勇気がありました。半ば駆け落ち同然の二人を、やがて父親も暖かく見守ります。当初は順調な新婚生活に見えた二人ですが、ある日、真緒自身と、彼女に関わる人々にある異変が起きてしまう……というストーリーです。この作品、ちょっと謎めいたファンタジーの味付けがしてあります。その謎を解く鍵は、ズバリ「猫だけが知っている」のですよ。お楽しみに。作品のモチーフとして「ビーズ」の楽曲が効果的に使われています。山下達郎氏が書き下ろした楽曲も、本作をより引き立たせていて、とても雰囲気がいいですね。こんな、甘く、切ないラブロマンスを見せられちゃあ、おじさんとしてはたまりません。家に帰ってから、ポール・サイモンの「時の流れに～ Still crazy after all these years」を久しぶりに聞いてしまいました。「いまでも、君に狂ってる、いまでも君に恋してるんだ」一途で、わがままで、後先考えない、無鉄砲な、若さゆえの恋。別れて後に、再び出会った昔の彼女に、いまでもやっぱり惹かれる自分がある……。オヤジになってもそんな歌が好きなのは、きっと幸せな事なんでしょうね。



本作は、恋人を映画館に連れ出すには、絶好のシチュエーションを作ってくれます。このチャンスに逃す手はありませんね。2013年、最強のデートムービーと言えるでしょう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 三木孝浩

主演 松本潤、上野樹里、玉山鉄二

製作 2013年

上映時間 128分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

http://m.youtube.com/watch?v=W--DavRun-s&desktop_uri=%2Fwatch%3Fv%3DW--DavRun-s

今日子と修一の場合

2013年10月28日鑑賞

「弱いニッポンのわたしたち」

想像をはるかに超えた、東日本大震災の惨状。心ある人達は、それぞれの行動を起こした。ある人は炊き出しを手伝い、ある人は、がれき撤去のボランティアを手伝う。同じように、表現をする者達は、いったい自分に何が出来るのか？ 誰もが悩み、頭を抱えた。

白状するが、私は何もできなかった。無力であった。そんな私が、震災をモチーフとした映画作品をあれこれ言うのは如何なものか？ その資格があるのだろうか？ と自問自答してみる。とりあえず、お金を払って映画を観た、ひとりの観客として、本作の感想を書く。



本作は、歪んだ世の中に揉まれて、犯罪を犯してしまった、男女の群像劇である。そのなかで奥田瑛二監督がフォーカスする二人は被災地の出身者だ。一人の女性は保険の外交員である。成績不良を理由に、上司からセクハラを受ける。契約を獲るためには、客とベッドを共にするのも止

む終えない。それが家族にも知られてしまい、彼女は夫と子供から引き離されてしまう。自分を売春婦にまで陥れる企業や社会。やがて家を出た彼女は、ちょっとヤクザな男と暮らし始めるのだが.....。

もう一人の若い男は、リストラされた父親の暴力に耐えかね、誤って父親を殺す。鑑別所に入り、刑期を終え、とある町工場に職を得た。その町工場の若い同僚は、かつて学校で陰湿ないじめに合っていた。女装させられ、パンツを脱がされ、ビデオに撮られる。彼はピアノがうまい。セーラー服の女装姿で、ピアノを弾かされる。そして、彼はパンツを脱がされた股間をビデオに撮っている同級生をナイフで刺した。そういう過去をもっている。こういった今の日本の現状は、信じられない程グロテスクだ。

世の中には社会的に強い人も、弱い人もいる。弱い者の一部には、自分の弱さを隠すため、あるいは、少しでも自分の社会的地位を維持するために、弱い自分よりも「更に弱い者たち」を見つけ出そうとする。そして自分より弱い者を「いつまでも弱くさせるため」に「飼育」しようとする。弱い者たちがいないと、成り立たない社会を生み出したのは、一体何が原因なのだろう。はっきり言って、今のニッポンと言う国家は「異常」である。

ご承知の通り、原発事故は「コントロールされている」とされている。まるで戦時中の大本営発表のように嘘くさい。原発事故のような面倒な物には「臭い物にはフタをする」という手法が、またもや取られている。そして、テレビではお笑い番組が垂れ流され「東京オリンピック誘致成功」で日本は湧いた。代々木体育館は予算3000億円などという馬鹿げた費用で建て替える予定だという。またもや、ゼネコンと土建屋が儲かる図式だ。

経済の活性化は、地方を切り捨て、東京だけ享受すればよいらしい。

日本の「総統閣下」は「それでいいのだ」とバカボンのパパのように開き直る。自衛隊という「危険なおもちゃ」を片手に、近隣諸国を挑発しながら.....。

異常だ。どう考えても異常だ。

そういう異常な日常が当たり前になることの恐怖。それより更に恐ろしいことがある。「何も感じない」「俺には関係ない」と知らんぷりしてしまうことだ。

一般ピープルはバカでアホウであってくれたほうが、この国の指導者達にとっては都合らしい。

だが、忘れてはいけない。かつての歴史を見れば簡単にわかることだ。このままでは、いずれ破綻する日々がやって来る。僕たちはそんな日常に、日々静かに穏やかにレイプされているのである。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 奥田瑛二

主演 安藤サクラ、柄本佑

製作 2013年

上映時間 134分

予告編映像はこちら

http://m.youtube.com/watch?v=N8ucPHMFhCk&desktop_uri=%2Fwatch%3Fv%3DN8ucPHMFhCk

映画に宛てたラブレター 2013・11月号

<http://p.booklog.jp/book/77432>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77432>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77432>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ